



Data

監督・製作・脚色・編集: クロエ・ジャオ

原作: ジェシカ・ブルーダー『ノマド: 漂流する高齢労働者たち』(春秋社)

出演: フランシス・マクドーマンド
/ デヴィッド・ストラザン
/ リンダ・メイ/ シャーリー
ン・スワンキー/ ボブ・ウェルズ

👁️👁️ みどころ

“ノマド”って一体ナニ？また、テレワークは知っているが、ノマドワークとは？ノマドランドとは？

女優、フランシス・マクドーマンド×ノンフィクション女性作家、ジェシカ・ブルーダー×北京生まれの女性監督、クロエ・ジャオ。この3人の女性の息がピッタリ！彼女たちは、広大なアメリカ大陸を旅する本物のノマドたちの生き方を如何にスクリーン上に描き出すの？

ベネチア国際映画祭で絶賛！ゴールデングローブ賞で絶賛！アカデミー賞でも6部門にノミネート！こりゃ必見！対抗馬は米国に移住した韓国人監督、リー・アイザック・チョンの『ミナリ』だが、その“頂上決戦”は如何に！？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ノマドとは？ノマドワークとは？原作は？■□■

辞書を調べると、「ノマド」(Nomad)とは、英語で「遊牧民」や「放浪者」の意味。遊牧民や放浪者のことを「ノマドロジ」とも言うそう。なお、ノマドの語源は、フランス語の「遊牧民」だ。また、「知恵蔵」の解説を読むと、近年、IT 機器を駆使し、オフィスだけでなく様々な場所で仕事をする新しいワークスタイルを指す言葉としてノマドが定着したため、このような働き方をノマドワーキング、こうした働き方をする人をノマドワーカーと呼ぶそう。2020年1月以降、新型コロナウイルスがパンデミック化する中、「テレワーク」という言葉が普及し、定着したが、それより以前の2010年頃からは、情報化社会の広がりの中でノマドワーキング、ノマドワーカーという言葉も生まれていたわけだ。なるほど、なるほど・・・。

もっとも、『ノマドランド』と題された本作のノマドは、IT 機器を駆使してノマドワークをしている人が主人公ではなく、「現代のノマド(遊牧民)」と呼ばれている女性、ファ

ーン（フランシス・マクドーマンド）が主人公。「現代のノマド」とは、家を持たずにキャンピングカーで暮らしている人々のこと。彼らは旅の先々で仕事を見つけながら、各地を転々としているようだ。日本でも、レジャーの1つとしてキャンピングカーでの気ままな長期の旅が人気になっているが、米国で近時大量のノマドが発生したのはそうではなく、2008年に世界を襲った金融危機によって経済的豊かさを失い、それまでの日常世界からはじき出された人たちが、止むを得ず始めた生き方だ。キャンピングカー1台さえあれば、広いアメリカなら何とか生活できるから、それもいいのでは？そんな風に気楽に考えることができればそれでいいのだが、何の何の！！その実態は？

本作の原作は、女性作家、ジェシカ・ブルーダーの『ノマド 漂流する高齢労働者たち』。これは、彼女が3年間にわたって、何百件ものインタビューをこなしながらノマドたちをレポートしたノンフィクションで、キャンピングカーに乗った彼女は、時には高齢者たちに交じり、低賃金労働の現場に潜入したこともあるようだ。

■□■主演女優は？女性監督は？女性3人のタッグに注目！■□■

2017年にそのノンフィクションを読んで衝撃を受けたのが、『スリー・ビルボード』（17年）（『シネマ41』18頁）で第90回アカデミー賞主演女優賞、第75回ゴールデングローブ賞最優秀主演女優賞を受賞したハリウッドのベテラン女優フランシス・マクドーマンド。マクドーマンドは直ちに本作の映画化権を購入したうえで、本作の監督には長編第2作たる『ザ・ライダー』（17年）の出来栄えに感動したクロエ・ジャオを起用すると決めたようだ。

1982年に北京で生まれた女性クロエ・ジャオは、子供時代にはモンゴル草原に憧れたそうだが、その後米国で生活し、成長していく中で、西部開拓の米国の歴史を知り、西へ西へと広大な大地を移動する姿に憧れを持ったらしい。そんな北京生まれ米国育ちのクロエ・ジャオ監督にとっては、マクドーマンドが持ち込んできたブルーダーの原作は、絶好の素材だったはずだ。ある新聞紙評で、彼女は「私は北京生まれで、モンゴルの大平原に憧れていました。米国に移り住み、それが中西部の風景への憧れになった。自分を見失った時、私は西に向かいたくなるんです」と語っているが、これは、目下鋭く対立しているとはいえ、大陸国の中国と、大陸国のアメリカで生まれ育ったからこそ言えること。如何に四季豊かな美しい日本国であっても、ちっぽけな島国にすぎない日本に生まれ育ったのでは、到底理解することのできない感覚だろう。

ドキュメンタリー映画のような本作を撮影するため、クロエ・ジャオ監督率いる撮影隊は、5カ月間、7つの州を旅しながらノマドのコミュニティと共に暮らしたようだ。また、マクドーマンドは実際にアマゾンの配送センターや赤カブの収穫工場などで働き、彼女自身の生き方、考え方を投影しながらファーンの人物像を作り上げたようだ。まさに女優マクドーマンドは、ホンモノのノマドになりきるべく懸命な努力をしたわけだ。本作に登場する本職の俳優はこのフランシス・マクドーマンドとデヴィッド・ストラザーンの2

人だけで、他の出演者は実際に車上生活を送っている人々ばかりだから、『ノマドランド』と題されたドキュメンタリータッチの本作での存在感はホンモノだ。なるほど、なるほど・・・。

日本では、森喜朗元東京五輪・パラリンピック実行委員会会長の「女性蔑視発言」後、東京オリンピック・パラリンピック大会組織委員会は女性理事の数を12人に増やし、割合を42%に引き上げる等の改善がなされた。そんな、ジェンダー・ギャップ指数が先進国で第121位の日本に比べれば、本作は原作、主演、監督のすべてが女性だから、本作を鑑賞するについては、そんな点にも注目！

■□■主人公はなぜ“現代のノマド”に？彼らの必需品は？■□■

本作の主人公は、“現代のノマド”の1人であるファーン。したがって、別の言い方をすれば、本作は夫を亡くした60歳過ぎの女性・ファーンを主人公にしたロードムービーだ。日本でもロードムービーの名作は多いが、やはりロードムービーは広い大地のアメリカが最もよく似合う。西部劇で見た、馬によるロードムービーもそれなりの味があるが、“現代のノマド”たちの移動手段はもっぱらキャンピングカーだ。日本でも軽自動車を改装したのから大型バスを改装したものまで、大小も金額もさまざまなキャンピングカーがあるが、さて、ファーンが乗るキャンピングカーは？私が老後の時間を暇とカネに任せて“現代のノマド”になるのなら、改装した大きなバスを選択するはずだが、ファーンが乗るのは小さな自家用車を改装したもので、その中に最低限の家財道具を積み込み、日雇いの仕事を求めつつ全米を移動する旅に出ることになったが、それは一体なぜ？

『ミナリ』の舞台は、2016年11月8日に投開票された米国大統領選挙で有名になった8つの激戦州ではなく、アメリカ南部のアーカンソー州だった。しかし、ファーンが住んでいたのは、アメリカ西部のネバダ州のエンパイア。2008年に世界を襲った“金融危機”は多くの人々の境遇を変えたが、ネバダ州でも炭鉱閉鎖で町が寂れてしまったため、ファーンはやむなく住居を処分し、キャンピングカーで暮らす道を選んだらしい。なるほど、なるほど・・・。

■□■ホームレス？いやいや、私はハウスレス！■□■

本作では、かつて代用教員をしていたファーンに対して、教え子の1人から「先生はホームレスなの？」と聞かれた時、ファーンが「私はホームレスではない。ハウスレスよ」と反論するシークエンスが大きなポイントになる。しかし、ホームレスとハウスレスは、何がどう違うの？本作を鑑賞するについては、その点をしっかり突き詰めて考える必要がある。

本作後半、故障したキャンピングカーの修理代を借りるため、久しぶりに訪れた姉の家で、結婚して幸せに暮らしている姉から、ファーンが「なぜ早くから家を離れたの？」「なぜ夫を亡くした後、家に戻ってこなかったの？」と質問されるシーンが登場する。この姉に限らず、誰でもそう考えるのが普通だが、ファーンの「ホームレスではなく、私はハウ

ストレスよ」という言葉を聞けば、ファーンの心の中には、“ハウス”はなくとも、ホーム、つまり、先に旅立った夫をはじめ、多くの家族の思い出が詰まっていることがよくわかる。『パラサイト 半地下の家族』(19年)、『シネマ46』14頁)では、主人公たち貧乏家族は、より立派な“ハウス”を求めて悪戦苦闘していたが、ファーンにとって、ハウスはキャンピングカーで十分、家族の思い出と共に生きるほうが大切だ、そう考えていたことが明らかだ。日本人も、1960年代の高度経済成長の中でマイホームを求めてあくせく働いてきたが、2021年の今、大切にすべきはホーム？それともハウス？

■□■この老齡女性ノマドに注目！彼女のライフスタイルは？■□■

ロードムービーたる本作のストーリー形成に大きく貢献するノマドは2人。その1人は、まず70代の女性ノマド、スワンキー(シャーリーン・スワンキー)だ。キャンピングカーで町から町へ移動するだけでなく、キャンピングカーを長期間駐車させたまま、ハウス代わりにして毎日働きに出るノマドにとって、車の維持は命の維持と同じ。したがって、タイヤがパンクした場合に備えてスペアタイヤを備えておくべきことはノマドのイロハのイだが、突然ノマドになったファーンはそんなことも知らなかったらしい。そんなファーンに対してスペアタイヤの不可欠さを説き、ファーンより10歳以上年長であるにもかかわらずパンクの修理をしてくれたばかりか、あれこれとサポートしてくれたのが彼女だ。

ノマドはある意味気楽だが、体の具合が悪いときは大変。末期がんと抱えたままノマド生活が続いているスワンキーに、そんな不安はないの？彼女はどんな人生観の中でノマド生活を楽しんでいるの？女優ではない本物の老齡ノマド、スワンキーは「病室で残された人生を過ごすより、ノマドとして旅して再びカヌーの旅をしたい」と語っていたが、さて・・・。

■□■この男性ノマドにも注目！■□■

ノマドになったファーンが本作の旅の中で出会う多くの本物のノマドたちは、乗っているキャンピングカーと同じように本当に多種多様。移動先もそれぞれの好みに任されているから、日本列島の感覚なら、普通は寒い時は南へ、暑い時は北へ、というパターンだが、広いアメリカではそうでもないらしい。スクリーン上では当初、アマゾンの倉庫で働きながらノマド生活をするファーンの姿が映されるが、ノマド仲間からいろいろな情報を集めるうちに、アリゾナ州で「砂漠の集い」というノマドのイベントがあることを知ったファーンはそれに参加することに。このイベントは著名なノマド生活者の作家や活躍中のユーチューバーがノマド生活者を支援するために開催しているものだが、ファーンはそこに参加する中でさらにノマド仲間が広がり、ノマドの生き方を学ぶ良い機会になったらしい。

そんな中で知り合った老ノマドが前述のスワンキーだが、新たに移動したサウスダコタ州のキャンプ場で新たな仕事を見つけ新たなノマド生活に入ったファーンは、そこでは「砂漠の集い」で知り合ったデヴィッド(デヴィッド・ストラザーン)と再会することに。ち

なみに、別れの挨拶は、日本語では「さようなら」、英語では「Good bye」だが、中国語では「再見」。それと同じように(?)、ノマド語(?)では、別れの時に「さようなら」とは言わず、「またどこかの旅先で(See you down in the road)」というそうだ。したがって、一度はこの言葉を交わして別れたデヴィッドと再会できたファーンは大喜びだが、デヴィッドはそれ以上に喜んだばかりでなく、どうもファーンに対して“ある種の感情”を持ち始めたらしい。そんなデヴィッドは息子に孫が生まれたことを契機にノマド生活に別れを告げたが、そこでデヴィッドがファーンにかける言葉に注目！

本作に登場する本物の俳優はファーンを演じるマクドーマンド以外はデヴィッドを演じるデヴィッド・ストラザーンだけだが、ノマドだって当然男と女。そこでは互いにどんな感情が？2人のプロの俳優はそれをさすがの演技で見せてくれるので、この男性ノマド、デヴィッドにも注目！

■□■ベネチア・GG賞で快挙！アカデミー賞の頂上決戦は？■□■

本作は①第77回ベネチア国際映画祭で金獅子賞、②第45回トロント国際映画祭で観客賞(最高賞)等を受賞したほか、③第78回ゴールデングローブ賞で最優秀作品賞と最優秀監督賞を受賞し、④第93回アカデミー賞では作品賞、監督賞、主演女優賞、脚色賞、撮影賞、編集賞の6部門にノミネートされている。

日本で3月26日に公開された本作の“対抗馬”は、同じようにアカデミー賞の作品賞、監督賞、主演男優賞、助演女優賞、脚本賞、作曲賞の6部門にノミネートされた米国育ちの韓国人監督リー・アイザック・チョンによる『ミナリ』(20年)だ。同じ日にこの両作を鑑賞した私は、両作の“頂上決戦”に注目！

2021(令和3)年4月7日記